

寺子屋師匠を育てた筆道家坂川暘谷

濱田 由美

はじめに

世界的にも高い識字率を誇ったとされる江戸期庶民の文字教育を支えたのが、寺子屋と呼ばれる民間の教育施設であることは広く知られている。文化文政期以降大きくその数を増やしたとされる寺子屋の存在が、文字を手習う子供の増加を促し、結果として近世庶民の識字能力の向上に大きな貢献を果たしたことは想像に難くない。

かつて『維新前東京市私立小学校教育法及維持法取調書』（以下『取調書』）では、「夥多ナル、或ハ能書ノ間ヘアルアリ、或ハ門弟夥シキニ名アルアリ、或ハ旧家ノ誉レアルアリ、又或ハ特種ノ長所ヲ以テ顕ハル、」⁽²⁾などの理由により、高名とされた江戸の寺子屋師匠が紹介されたが、中でも特に「此門中、師家ヲナスル者頗ル多シ、」と評されたのが、坂川暘谷の芝泉堂であった。実際暘谷の指導によりどれ程の師家が誕生したかは定かでないものの、乙竹岩造氏は『日本庶民教育史』（以下『教育史』）の中で暘谷について、「その門下からは更に多くの寺子屋が文脈派生した」⁽⁴⁾のであると指摘した。さらに、泉字を堂号に表すことで系統を明らかにしていたとして、宝泉堂（黒田藤一郎・東泉堂（熊谷暘周）・蓮泉堂・松泉堂など、堂号に泉の字を有する暘谷門下の寺子屋の存在を明らかにしている。また一方、『三重先賢伝』では暘谷について、「著ハス所刊行ノ書帖二十五種、広ク世ニ用ヒラレ、尚ホ芝泉堂書話三卷アリ、」⁽⁵⁾との記述が残されている。

この様に多くの寺子屋師匠を育て、著書を残したと伝えられている

ものの、これまで暘谷について詳細に語られたものはほとんど残されていない。ここでは、時に「暘谷流」とも称されたその書法により、三千人とも伝えられる多くの門弟を育てた芝泉堂の師匠坂川暘谷を通して、近世庶民の識字教育を支えた筆道家について考えてみたい。

一、坂川暘谷と暘谷流

芝浜松町二丁目に書道塾を設け、多くの門弟を育てたとされる暘谷は、安永七年（一七七八）菰野宿野村（三重県菰野町）に誕生した。名臣を平治郎、後に平学と改めたと伝えられる。暘谷の父吉右衛門喜長は、菰野藩十人扶持御賄役を務めたとされるものの詳細は不明である。菰野町に残された「維新以前郷土教育概覧」⁽⁷⁾（以下「教育概覧」）には、暘谷に関する次の記述が残されている。

江戸二出テ栗田門派溝口流ノ書道ヲ松野雲谷ニ学ヒテ免許皆伝ヲ受ク、芝ニ私学芝泉堂ヲ興シ、広ク諸藩ノ右筆ニ書道ヲ授ク、

『取調書』によると、松野龍谷は青蓮院御直門であり、その書法を悉く伝授された人物と伝えられる。⁽⁸⁾伏見天皇の第六皇子である青蓮院宮尊円法親王の創始による御家流は師資相承であり、その流派からは多くの書流が生まれたと伝えられる。その中の一つ溝口流の書家である龍谷の書法には、乾巻・坤巻・いろはの巻・陰巻・陽巻と五段階あり、同書に残された「乾巻伝授ヲ終ヘ、又坤巻ヲ伝授セラルニ及ビテハ、所謂谷号を授カリ、高弟ニ列スル、」⁽⁹⁾の記述により、龍谷が高弟への谷号伝授を

始めたことは明らかである。もともと、実際に谷号が伝授されたのは百七八十年間にわずか四八名^⑩とあり、免許皆伝となるのは容易でなかったと想像される。「溝口流谷号伝授ノ姓名表」によると、松野龍谷から溝口千谷・松野暁谷・同雲谷へと谷号が伝授されていたことは明らかである^⑪。また、一般に書法伝授に際しては、他言せずとの誓約文の提出が求められており、筆法の流失には厳しく注意が払われていたものと想像される。

修行の後、晴れて免許皆伝となった賜谷の塾には、菰野藩の右筆・代官なども指導を受けに來たと伝えられており、菰野藩で代官を務めていた辻家にも、二代目録造が弘化四年（一八四七）に賜谷より賜った、琮泉堂・賜琿の免許状が残されている^⑫。

また、この賜谷の書法を正式に採用したのが忍の藩校進修館である。『忍藩校進修館沿革略記』には次の記述が残されている。

賜谷・御家ノ二流ハ公文書ノ筆写ニ適応スレバ之ヲ研究スルモノ多ク、唐様ハ当時惡筆、唐様ニ似タリト言ヘル譚アリテ、士分以上ノ者ニアラザレバ、此書体ヲ練習スルモノ極メテ稀ナリキ、

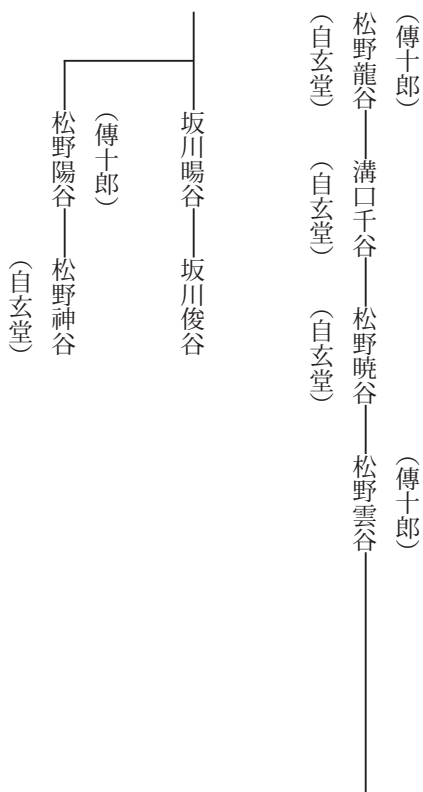
この記述により、賜谷の書法が当時賜谷流と称されていたことは明らかである。もともと『取調書』によると、「御家流ハ古來盛ニ行ハレ、光悅流・瀧本流・伝内流・大橋流・溝口流・花形流・百瀬流・長尾流等ハ皆此御家流ヨリ出タル支流ニシテ、後世益々其流派ノ多キヲ見ルニ至レリ、^⑬」とあるように、賜谷の修行した溝口流は御家流の支流であるため、実際には双方に大きな違いは無かったと想像される。

先の「教育概覧」によると、菰野における賜谷の師は儒者の小沢蜂陵であり、その門下には忍藩の藩校進修館の命名者、平井澹所の名も見受けられる^⑭。進修館は、伊勢桑名藩主松平忠翼が文化一〇年（一八一三）に創設した藩校であり、松平忠堯が忍へ転封となった後の天保七年（一八三六）八月、忍藩領に再設されていることから、桑名に近い菰野

の出身である賜谷あるいは澹所は、創設期の進修館に深く関わっていたものと想像される。

二、溝口流谷号伝授の筆道家たち

先の『取調書』には、「溝口莊司ハ千谷ト号シ、青蓮院宮家ノ御直門ナリ、其祖先ハ松野龍谷ニシテ、御直門タルノミナラス、書法皆伝且龍谷ノ号モ賜ハル所ニシテ、高弟ノ輩ニハ谷ノ一字ヲ讓ルコトナリシト、龍谷ヨリ溝口千谷ニ至ルニ及ビテヤ門人頗ル多ク、溝口流ノ稱是ニ於テヤ起リ、且大二流行セシト云フ、千谷ヨリ同暁谷トナリ、次ニ松野雲谷同陽谷同神谷等世々相讓ル、而シテ坂川賜谷（芝泉堂）ハ松野雲谷ノ門弟ニシテ、芝ニ住シ其門人頗ル多カリシト云フ、^⑮」との記述が残されている。谷号伝授を始めた龍谷より続く筆道家の流れを図に示すと次のようになる。



また、『新撰増補和漢書図一覽』の「溝口流谷号伝授ノ姓名表」より作成

ている。

御家ヨリ出テ一流ヲナス、門人三千余アリト云、(中略)一時ノハヤリモノニテ、門人千ヲ以テカゾフトイヘトモ、ワズカ十年許ヲ過レハ、又新ニ流ヲ称スルモノ出テ、忽ニ其書風廢シ、其名モ知レズナリユク、⁽¹⁹⁾

当時流派を名乗る事がどれ程の意味を有していたかは定かでないものの、右の記述からは、門弟を千人程も抱えた筆道家であれば、自らの流派を名乗っていた可能性は否定できない。また、暘谷の著した『家訓往来並官名』には、門人枝川暘洲による次の記述が残されている。『商売

芝泉堂先生書する処の商売往来刻、すでに来る先生に就く学人始千人に満り、今此冊を以てする事は、人毎に手書して与ふるの労を省くためなり、且書肆の需に止事を得ず、世に公にするに至と云、^(八世)

文政乙酉仲夏

門人 枝川暘洲識⁽²⁰⁾

また『取調書』には、「凡師家タルモノ、何々堂トノ号アラザルハナク、(中略)其号ハ師匠タルモノ、其先師ヨリ授カリシ書号ノ一字ヲ冠スルモアリ、」の記述が残されており、堂号は師匠より譲られた書号の一字を用いて名乗っていたと思われる。同様の記述は、菰野町に残された龍崎養中(半右衛門守脩)による「源泉堂暘混説」の中にも残されている。「謁して言う、請う、泉暘の二字を執りて、我の字号を撰めんと。是れ芝泉堂の故事なり。」この記述により、暘谷が門弟に与えたのは、泉と暘の二文字であったことは明らかである。ちなみにこの源泉堂暘混とは、菰野藩で代官を務めた録蔵の兄津右衛門孝長のことで、数術に優れ菰野藩士として江戸に赴き、書記の仕事に携わった人物とされる。⁽²¹⁾ また一方の龍崎養中は、菰野出身の儒者である。⁽²²⁾

三、暘谷の著作と筆道指導

寺子屋の教科書とも称される往来物は、印刷技術の向上も手伝って、凡そ七〇〇〇種が広範に流布したと伝えられている。⁽²³⁾ 暘谷にも多くの著作があつたことは先に述べたが、これまでその殆どが残されていないと考えられていた。昭和一六年(一九四一)に刊行された『菰野町史』にも、「村内幸に肉筆のもの二三在するも、板行のものは殆ど遺存するものなし、」と記されている。また、多いと伝えられるその数についても、これまで暘谷の著作は二五種類程と考えられていたものの、実際には書名だけに限るなら思いの外多く、現存が確認されている暘谷の著書『家訓往来並官名』⁽²⁴⁾ 仮名文 詩歌』・『家訓往来並官名』・『家訓往来』の三冊に記載されている『芝泉堂先生発行書一覽』、並びに『菰野町史』だけでも、三九種の書名が確認された。

書名	①	②	③	④
女今川	○	○	○	○
ちらし書	○			
商売往来	○	○	○	○
四季詩歌	○			
女教訓千代の鶴	○	○	○	
庭訓往来	○	○	○	○
百体百人一首	○		○	○
消息往来	○	○	○	○
書札仮名文詩歌	○			
瀟湘八景詩歌付百官折本	○			

集芳帖																			
四季ちらし折本																			
風雅帖																			
龍田帖																			
和漢朗詠集																			
御成敗式目																			
小野道風語石摺																			
風月往来																			
和漢詩歌合																			
百人一首																			
明衡往来																			
芝泉堂書話																			
本朝名公法帖																			
書札																			
謹慎語																			
江戸往来																			
伊呂波帖																			
書札文集																			
詩歌帖																			
通俗用文章																			
掌玉書札大成																			

女大学																			
五常語																			
新春帖																			
隅田川往来																			
書札大成																			
女今川艶紅梅																			
書札並仮名文																			
嘉栄再書																			

①『^川御家書札 仮名文 詩歌』文政五年（筆者所有）

②『^家商売往来並官名』文政八年（辻俊雄氏所蔵）

③『^家庭訓往来』文政十一年（辻俊雄氏所蔵） ④『^孤野町史』

これらの著作の中で、最も早い時期に刊行されたのが文政五年（一八三三）の記述が残る『^川御家書札 仮名文 詩歌』である。暘谷が書家として活躍した時期を特定できる記録は今のところ確認されていないものの、この書の記述により、文政五年には既に筆道指導に携わっていたものと想像される。同書には、

改年之御慶不^レ可^レ

有^二尽期^一候、

公方様、大納言様、益

御機嫌能被^レ成^二御座^一、

年始之御規式、首尾好

相済可^レ申^二奉^一恐悦^二候、

将又、貴様愈御堅固

可^レ被^レ成^二御越年^一、珍重

存候、年頭之御祝詞

為^レ可^レ得^二御意^一、如^レ斯御座候、

猶期^二永日之時^一候、

恐惶謹言、

正月

一筆致^三啓上^二候、然者

今度私儀、京都

御使相勤候付、可^レ被^レ任^二

少将^一之旨、被^二

仰渡^一候、併官位昇進

之儀不^レ得^二

上意^一、難^レ及^三御請^二旨

申上候、此等之趣御執成

所^レ仰候、恐惶謹言、

月 日

などの例文が数多く納められていることから、庶民に向けた書ではなく、広く諸藩の右筆に書道を授けていたとされる暘谷が、彼らの指導書として作成したものであると想像される。記録に残る著書の中には先の一覧からも明らかのように、書札だけでも六冊が確認されており、多くの門弟を抱えた暘谷が、必要に応じて指導書を作成していった結果、数が増えていったものと思われる。先の『^{家御}商売往来並官名』には、「今此冊をもつてする事は、人毎に手書きして与ふるの労を省くためなり」との記述が残されており、本来手本は手書きが基本であったと思われるが、敢えて板行することを選択した背景には、門弟の増加があったことは想像に難くない。また暘谷の著作である文政十一年（一八二八）に刊行された『庭訓往来』が、安政三年（一八五六）に再刻されていたことは

明らかであり、息の長い支持があったものと想像される。もともと、『東京掃苔録』によると、暘谷は嘉永二年（一八四九）六月一日に亡くなっていることは明らかであり、暘谷亡き後の再刻であったものと思われる。

四、暘谷の門弟による寺子屋

文政四年（一八一二）に刊行された『筆道師家人名録』（以下『人名録』）には、当時活躍の筆道家が四九六名記録されている。この編さん目的は凡例により明らかである。

凡 例

○此編所謂筆道諸流先生ノ名家ヲ記載セシハ、子弟ノ学ハント欲シテ、師家ヲ求ル者ノ一助トスルノミ、

○諸家ノ排列順次ハ優劣ヲ論セス、但聞識ニ從ヒ關札ヲ取り、是ヲ定ム、又伊呂波ヲ以テスルハ、其姓名ノ搜索ヲ便トスルノミ、²⁹⁾

この書には、誰の門弟であるかを明記した筆道家が少なくない。中でも多くの門弟を抱えた師匠としては、著者である村上帰旭の父、村上酒山（五二名）を筆頭に、岩田夫山（一八名）・玉江藍皐（一三名）・蓮池堂文盟（九名）などの存在が際だっている。また、この中で暘谷の門人として記録されたのは以下の六名である。

田中暘明 宗十郎町

柳沢暘岳 小川町

枝川暘洲 愛宕町

宮田暘溪 日比谷

足田暘泰 愛宕町

鈴木暘嵩 芝中門前二丁目

ここに記された六名は、いずれも名前に暘の字が使われている。また、

先の『教育史』に紹介された寺子屋の中の蓮泉堂（小岸陽淡）、東泉堂（熊谷陽周）、さらには菰野の琮泉堂（陽琤）においては、「源泉堂陽混説」にある、「泉陽の二字を執りて、我の字号を撰めんと、是れ芝泉堂の故事なり、」の記述通り、泉と陽二字の使用が確認されている。

東泉堂（熊谷陽周）は、明治五年（一八七二）の学制頒布の後、「私立小学校設立願」（以下「設立願」）を提出し、薫陶学校と名前を変えた。明治七年（一八七四）に作成された「設立願」は、今も東京都公立文書館に残されている。

一 教員履歴

教師

東京府貫属士族

熊谷益幸父隠居

熊谷源次郎

戊五十八歳十一月

文政八乙酉年三月ヨリ天保天保五甲午年七月マテ、都合十ヶ年之間、^(一八三四)

旧仙台藩士大沢赤城へ従学支那学修業、文政七年甲申年正月ヨリ天

保六乙未年二月マテ、都合十二ヶ年之間、元米津伊勢守家士坂川平

学へ従学筆道修業行、同年二月開業、^⑩

ここに記されている米津伊勢守とは、長瀨藩（山形県東根市）の二代

目藩主、米津政懿のことと思われる。この藩は、寛政一〇年（一七九八）

米津通政が初代藩主となった小藩で、藩士以下重臣は皆愛宕下の上屋敷

に常駐していたと伝えられる。陽谷がこの米津伊勢守の家臣になった経

緯は不明であるものの、浜松町二丁目の陽谷の塾と長瀨藩の上屋敷が近

距離に存在していたことは否定されない。

また、この藩は明治四年（一八七一）に上総国大網藩知事であった米津政敏が藩庁を常陸国河内郡龍ヶ崎村（茨城県竜ヶ崎市）に移したことで、龍ヶ崎藩と改称されたと伝えられており、蓮泉堂（小岸陽淡）の「設

立願」（以下「設立願」）には、坂川平学は旧竜ヶ崎藩士と記されている。

一 教員履歴

東京府管下平民

小岸重右衛門

五十四歳三ヶ月

文政八乙酉六月ヨリ天保六乙未年迄、都合十一ヶ年間、旧中津藩士山川桂蔵江従学支那学修業、文政八乙酉年十月ヨリ同十二年迄、都合五ヶ年間、同藩士佐藤三弥江従学筆道并算術修業、弘化二乙巳年十一月ヨリ明治四年五月まで、都合十七ヶ年間、旧竜崎藩士坂川平学江転学筆道修業、明治六年九月ヨリ東京府講習所二於テ、小学教則講習仕、同七年二月卒業。弘化元甲辰年ヨリ明治七年迄、都合三十一ヶ年生徒教授罷在候、^⑪

この「設立願」を提出した陽谷の門弟は、熊谷源次郎・小岸重右衛門の他に、初音学校の佐藤眺谷・本嶋学校の本嶋明山・雨国学校の松浦明谷の三名が確認できるものの、いずれも龍ヶ崎藩士坂川平学の門弟との記述が残されている。「設立願」に残された本嶋学校の教員履歴を見ると、

東京府管下

平民

本嶋明山

四十八歳六ヶ月

弘化二年乙巳年正月ヨリ嘉永二己酉十一月迄、都合五ヶ年間、旧幕臣宮崎次郎大夫江従学支那学修業、明治二己巳年三月ヨリ同三庚午年十月迄、都合二ヶ年間、東京府管下平民渡辺栄之助江従学和算修業、嘉永元戊申年十一月ヨリ同二己酉年六月迄、都合二ヶ年間、龍ヶ崎藩士坂川平学江従学筆道修業、同年十一月ヨリ慶応三丁卯年十二月迄、都合十九ヶ年、東京府管下平民松浦明谷江転学筆道修業、明

治六癸酉年九月東京府於講習所、小学教則講習仕、同七甲戌年二月十二日卒業、嘉永二己酉年正月ヨリ当甲戌年迄、都合二十六ヶ年間、生徒教授罷在候³²、

との記述が残されている。同様に、兩國学校の松浦明谷の教員履歴には、

教師

松浦明谷

成五十八歳一ヶ月

天保七年丙申十一月ヨリ嘉永二己酉年迄、都合十四ヶ年間、竜崎藩士坂川平学工従学支那学并筆道修業、天保十一庚子年正月ヨリ開業、当明治七年四月迄、三十五ヶ年生徒教授罷在³³

と記されている。両名の記録から本嶋と松浦が共に暘谷に亡くなる直前まで指導されていたことは明らかであり、暘谷亡き後は松浦が、筆道修行を始めて日の浅い本嶋の指導を引き継いだものの、同様の対応が他の門弟にもなされていたかは不明である。また、暘谷が支那学指導もおこなっていた事実は、松浦の記録により明らかとなった。

この「設立願」には、旧川越藩松野伝十郎へ従学した坂口武右衛門（坂口学校）と、松野雲谷へ従学の大沢重喜（墨淵学校）の記録も残されている。暘谷の師である松野雲谷が、伝十郎と称していたことは、『取調書』に残された「溝口流谷号伝授ノ姓名表」により、明らかである。また、暘谷への従学時期も「設立願」により、それぞれ文政七年から天保七年、あるいは文政一〇年から天保元年と大きく異なっていないことから、ここに記された雲谷と伝十郎は同一人物と思われる。さらに菰野町の辻家にも、「武州川越城主 松平大和守殿臣 溝口流高弟 松野伝十郎書」と記された色紙が残されており、この書も暘谷の師である松野雲谷のものである可能性は否定されない。いずれにしても暘谷も伝十郎も共に筆道指導を通じて諸藩に出仕していたことは明らかである。

おわりに

一説によると、江戸には一二〇〇もの寺子屋が存在したと伝えられる³⁴。実際の数は定かでないものの、文政年間（一八一二―一八二九）には、「師弟ノ学ハント欲シテ師家ヲ求ル」ために『筆道師家人名録』が必要とされるほど、教育熱が高まっていたことは事実であり、そのような社会状況が寺子屋教育の普及をも促したことは想像に難くない。もともと、全ての師匠が確かな筆道修行の後に寺子屋を開業したとは限らないものの、谷号伝授の筆道家達のように、一定のレベルに達した証として名前を伝授された指導者も、徐々に数を増していったことは想像に難くない。

また、寺子屋の教科書と呼ばれる往来物は、およそ七〇〇種類もあったと伝えられている。先にも述べた通り、暘谷にも多くの著書があったことは広く知られているものの、その背景には沢山の門弟を抱えたことで、筆道指導のために手本の板刻が必要となったことに加え、様々な立場の門弟に応じるため、その教材となる書の種類が増える状況にあった事は明らかである。

暘谷は筆道家としての活躍の場が主に江戸であったため、郷里での評価は思いの外高くはないものの、亡くなる直前まで菰野の代官・右筆への筆道指導に尽力していたことは、辻録蔵に与えた免許状により明らかである。また、同家に贈られた「弄花香滿衣³⁵」の書によって、暘谷晩年の筆跡が辛うじて今に伝わっている。

いずれにしても、当時多くの門弟を抱えた筆道家が決して少なくなかった事は、先の『人名録』により明らかである。この門弟増加に尽力した塾の存在が、寺子屋増加の背景にあったことは明らかであり、暘谷の塾もその中の一つとして、近世庶民の識字能力向上の一翼を担ったものと思われる。

註

- (1) 石川謙 『寺子屋』 至文堂 一九六〇年 九八頁
- (2) 大日本教育会 『維新前東京市私立小学校教育法及維持法取調書』 一八九二年（国書刊行会 『明治教育古典叢書』 一九八一年）附録 一三頁

(3) 『前掲書』 附録一三頁

(4) 乙竹岩造 『日本庶民教育史』 中巻 臨川書店 一九七〇年 六九三頁

(5) 浅野儀史 『三重先賢伝』 別所書店 一九三二年 一〇六頁

(6) 菰野町史編纂委員 『菰野町史』 菰野町史刊行会 一九七四年復刻（一九四一年初版） 三五九頁

(7) 『維新以前郷土教育概覧』（菰野町立図書館所蔵）

(8) 『取調書』（前掲） 一〇頁

(9) 『取調書』（前掲） 一一頁

(10) 『取調書』（前掲） 一一頁

(11) 『取調書』（前掲） 一一頁

(12) 『取調書』（前掲） 一一～一二頁

誓約之事

入木道之事、御伝授被_レ成下_二候趣、他人者勿論、雖_レ

為_二親子兄弟_一、聊不_レ可_レ及_二言外_一、御伝之品並聞書等仕

候共、没後可_レ致_二返上_一候、尤御流儀大切相守可_レ申事、

右之趣於_二相背_一者、日本国中大小之神祇氏神白山大権

現、別而天満神筆硯童子可_レ蒙_二冥罰_一者也、仍而誓状

如_レ件

弘化二巳年六月朔日

御坊官中

諸大夫御中

梅沢和亮印

敬典華押

右の誓約文は一例であるものの、免許皆伝の折には、この他に起請文の提出等も求められており、それぞれの筆法は大切に守られていたものと思われる。

(13) 辻俊雄氏所蔵

琮泉堂

陽琇

右可号之也

青蓮院宮御直門

芝泉堂

坂川陽谷

弘化四丁未年

九月吉辰

辻録倉殿

(14) 古市直之進 『忍藩校進修館沿革略記』 大沢龍次郎商店

一九二五年 二七頁

(15) 『取調書』（前掲） 五頁

(16) 『維新以前郷土教育概覧』（前掲）

(17) 『忍藩校進修館沿革略記』（前掲） 一～四頁

(18) 『取調書』（前掲） 一〇頁

(19) 石文山人 『和漢書画一覽』（国立国会図書館所蔵）

(20) 坂川陽谷 『御家商売往来並官名』 文政八年（辻俊雄氏所蔵）

(21) 『取調書』（前掲） 五頁

(22) 龍崎養中 『源泉堂陽混説』（菰野町立図書館所蔵）

(23) 『前掲書』

(24) 『維新以前郷土教育概覧』（前掲）

(25) 梅村佳代 『近世民衆の手習いと往来物』 梓出版社 二〇〇二年

(26)『菰野町史』(前掲)

(27)坂川暘谷『御家庭訓往来』安政三年(一八五六)辻俊雄氏所蔵

辻氏所有と同じ『御家庭訓往来』であるが、望月文庫蔵の奥書には、文政戊午仲冬新刻 安政三丙申年再刻の記述が残されている。

(28)『東京掃苔録』(『続日本仕籍協会叢書』第五期 一九八二年・一九四〇年初版 東京大学出版会) 一七三頁

名貴文 芝泉堂と号す 書名高し

嘉永二年六月十四日歿 年七十二

文光院教道日学居士

(29)森銑三・中島寿編 文政四辛巳校正『筆道師家人名録』(『近世人名録集成』第四卷) 勉強社 一九七六年) 五六〇頁

(30)「私立学校設立願」乾(一八七四年) 東京都公文書館所蔵

〔前掲書〕

〔前掲書〕

〔前掲書〕

(34)石川謙『寺子屋』(前掲) 九三頁

(35)「弄花香滿衣」芝泉堂川暘谷七十一翁書(辻俊雄氏所蔵)

その記述により、暘谷が亡くなる前年に認めたものであることは明らかである。